

情報基礎論：何をどのように教えるのか —学生による授業評価—

小棹理子¹・石川幹人²

1. 湘北短期大学電子情報学科助教授（明治大学商学部兼任講師）

2. 明治大学文学部助教授（明治大学教育専門部会部会長）

1. はじめに

2002年度より小学校・中学校では情報教育を取入れた新課程へ移行する。また、実体はいまだ不明瞭ではあるが、最近のIT（情報技術）化の急速な進展に伴い、大学での情報教育も近々大きな変革を経験するであろうことは想像に難くない。

現在、明治大学情報科学センター(以下明治大学ISC)では理工学部を除く法、商、政経、文、農、経営の各学部および短期大学の学生を対象に、情報関係科目を原則、全学共通科目として設置している。情報の初学者対象には情報基礎論（以下基礎論）Ⅰ、Ⅱがそれぞれ半期科目（約50名の教員が担当）として設けられており、「インターネットコミュニケーション」、「インタラクティブコミュニケーション」、「コンピューティング」、「プレゼンテーション」により構成されている。ただし、基礎論Ⅱは基礎論Ⅰの履修が前提となっている。また、これらの枠組みは、98年度から大幅に変更されている[1]。

さて、情報教育の2度目の変更はどのようなものになるのだろうか。上記科目の変遷を振り返り、また、学生に対するアンケート結果から、つまり、受講側の意識という視点から、新しい情報教育を考える一助としたい。本稿は「学生の視点」を紹介するという点で新しい。

Venue of Turning Point in Information Literacy —Students' Point of View—

Riko Ozao¹ / Masato Ishikawa²

1. North Shore College of SONY Institute

E-mail: ozao@kisc.meiji.ac.jp

2. Meiji University

E-mail: ishikawa@kisc.meiji.ac.jp

2. 明治大学における情報基礎論の枠組みの変遷

詳細は既報[2]にゆずり、要点を以下に示す。

(1) 96、97年度の情報基礎論

コンピュータのみならず情報とそれを取り巻く情報環境にまで視野を広げ、それらの正しい知識と基礎的な利用法を修得するとともに、情報化社会におけるコンピュータや情報の役割と意義についての問題意識を養うための基礎的講座として設置された。コンピュータの扱い方やソフトウェアの使い方だけに力点をおくのではなく、情報の処理・通信・蓄積をとおして情報の意味を知り、また創造のための手段・手法・方法論を学ぶことを目的としていた。

(2) 98年以降の情報基礎論

前述のように、98年は枠組みが大きく変わった年である。基礎論Ⅰでは「コミュニケーション」を重視した授業になるため、知識面の充実をはかり学生向けテキストを用意した。情報関連科目群テキスト編集委員会設置準備委員会が設置され、97年12月25日には同委員会設置準備委員会委員長（石川幹人）よりテキスト作成の進め方が提案された。98年6月～7月にかけて全8巻の概要がほぼ決まり、うち2巻が99年度の授業より利用されている。現在、6巻が刊行され、さらに3巻が発刊される予定である。

また、99年度からは、上記情報基礎論の新しい枠組みにそった「ミニマム・リクワイアメント」が設けられた[3]。すなわち、基礎論Ⅰが教職科目履修者の必修科目となるのに伴い、履修学生が最低限獲得すべき知識・技能を明文化している。

3. 授業アンケート

年度(クラス:水曜1, 2, 3限)	98	99(1)	99(2)	99(3)	00(1)	00(2)	00(3)
5段階評価平均	3.05	3.88	3.86	3.65	3.83	3.84	3.59
パソコン(PC)所持率	38.9%	48.5%	40.9%	37.0%	64.3%	86.5%	75.0%
パソコンを今後購入したい(2台目も含む)	62.2%	55.9%	65.9%	69.6%	45.2%	35.1%	25.0%
回答数	37	34	44	46	42	37	44
項目選択回答数	29	33	42	45	39	37	35
(1) パソコンを使う機会が多かったから	58.6%	69.7%	76.2%	68.9%	64.1%	56.8%	71.4%
(2) インターネットが使えるから	65.5%	57.6%	69.0%	62.2%	71.8%	54.1%	48.6%
(3) メールが使えるようになったから	58.6%	81.8%	88.1%	77.8%	56.4%	43.2%	57.1%
(4) パソコンの歴史的背景がわかったから	17.2%	3.0%	16.7%	2.2%	12.8%	21.6%	8.6%
(5) パソコンのしくみや機械のことがわかったから	10.3%	9.1%	11.9%	11.1%	12.8%	27.0%	22.9%
(6) パソコンの利用方法がわかったから	13.8%	42.4%	31.0%	33.3%	53.8%	35.1%	57.1%
(7) 「情報」について考えたから	10.3%	9.1%	7.1%	4.4%	20.5%	8.1%	22.9%
(8) その他(具体的に)	略						

小棹担当の基礎論 I では 98 年度より授業に対し、期末に上記アンケートを実施してきた。5 段階での評価とその根拠を聞いたものである。項目は複数選択可能である。紙面の関係から肯定の場合のみを記している。

98 年度では比較的(4)の比率が高い。パソコン(PC) そのものにも興味があることがわかる。PC 所持率が高くなるに連れ、(3)が圧倒的に高くなり(99年)、コミュニケーション手段としての活用が増加するのが示唆される。00 年度は、PC 所持率が約 7 割になり、(7)が増えている。PC の操作法、ネットワーク活用から一歩進んだことを表していると思われる。なお、2 時限のクラス(00(2))は PC 所持率が高いが回答数が他のクラスより低い。脱落者が多いクラスであるためである。PC 操作段階で挫折したことが懸念される。

4. おわりに

97 年度までは、情報リテラシーはいわゆる「かきかた」に相当し、道具の操作にも重点がおかれていた。98 年度以降は「人⇄PC」から、「人⇄人」の関係構築へ PC+ネットワークを利用することが重視されている。つまり、情報は「人」間でやり取

りするものであり、PC+ネットワークは情報を扱うツールであるという理解が得られている。さらに、00 年度では、「情報」そのもの、つまり、情報の質、価値、に対する興味が増していることが示唆される。今後は少なくとも以下の点に留意した情報教育が重要であろうと思われる。

(1) 情報の基礎知識および PC 操作の徹底取得、いくなれば「PC 識字率」100%の達成。(2) 情報のクオリティー価値一についての理解。(3) PC を利用することの利点の理解。PC 以外の情報機器との差別化。(4) 教員と学生のコミュニケーションを重視した学生参画型授業の実施。

参考文献

- [1] 明治大学情報科学センター：情報関係科目シラバス(1996 年度～2000 年度)
- [2] 小棹理子,石川幹人：「情報教育：何を教えるか、いかに教えるかー学生アンケート活用例」平成 12 年度情報教育研究集会論文集 A2-2 (2000)、pp.48-51.
- [3] 明治大学情報科学センター：「情報基礎論 I のミニマム・リクワイアメント」(1998 年 11 月 21 日)